

2006年5月7日 復活節第4主日礼拝

『言葉を尽くして』

(申命記6章4～5、使徒言行録20章1～6)

エフェソの町で、パウロは三年の間伝道に励みました。神様は、その働きを祝福してくださったので主イエスの言葉は広まって行きました。主の言葉が広まるとそれに反対する人達も出てきました。それは、エフェソの町でアルテミス神殿の模型を売っていた銀細工職人デメトリウスとその同業者達でした。この人たちは、パウロのせいで商売があがったのだと思いました。そうして、彼らはパウロの同行者達を捕まえて町中を巻き込んだ騒動を起しました。騒ぎに加わった人々の中には、何のために集まっているのか訳も分からず騒いでいる人さえいました。しかし、一人の良識ある町の書記官が人々を説得し騒ぎは静められました。

さて騒ぎは収まった後、パウロはこれからの事を考えなければなりません。パウロは、弟子達を呼び集め励まし、エフェソの兄弟たちに別れを告げました。これ以上エフェソの町で騒ぎを起すことは、これからの教会のためにならないと判断したからです。それでパウロは、皆に別れを告げてエフェソを出発したのです。2-3節「マケドニア州へと出発し、この地方を巡り歩」きました。パウロが巡り歩いたマケドニアの町々は、それぞれにいきさつがありました。パウロは、聖霊の導きによってマケドニアでの伝道をするようになりました。そうして、パウロはシラスやテモテらと一緒に、マケドニア州のフィリピやテサロニケ、ベレアの町で伝道したのです(16章11～17章15)。それは、決していつも順調には行きませんでした。それぞれの町で、神様はパウロ達の伝道を祝福され、イエスを信じる人達が与えられたのです。しかし、そこには反対する人たちも現われたのです。エフェソの町であったのと同じような事がそれぞれの町でありました。パウロが、かつてフィリピの町に行った時は、こういうことがありました。ある日、パウロとシラスは、占いの霊に取り憑かれた女の人に会いました。パウロは、この人を霊から解放したのです。ところが、この女の主人は金儲けの望みがなくなった事で怒りました。この人たちは、エフェソの町で偶像を売っていた商人達と同じような事をしたのです。パウロ達は、町の人を惑わして騒ぎを起してる等と並べたてられて、牢獄に入れられました。これは、事実無根でしたのでパウロの達は、釈放されます。しかし、町の役人は丁重にパウロ達に出て行くように頼みました。

次ぎに行ったテサロニケの町では、神をあがめる沢山のギリシャ人や婦人達がイエス様を信じました。しかし、これを妬んだユダヤ人達は町にたむろする群衆を抱き込んで騒ぎを起します。パウロの仲間の何人かの兄弟が逮捕されました。この騒ぎのために、パウロはこの町も追われて行きました。次ぎに行ったベレアの町。この町のユダヤ人は、素直に熱心に御言葉を受け入れました。ギリシャ人の婦人や男の人達も信仰に入りました。ところが、この噂を聞きつけてテサロニケの町のユダヤ人達が妨害にやってきました。75 kmも

離れたテサロニケからベレア町までやって来て、町で騒ぎを起したのです。このためにパウロはこの町も去って行きました。かつてこのようにいきさつにあったこの町にパウロはやって来ました。しかも、また反対ににあった後でした。パウロは、コリントの教会への手紙にこう書いています。「マケドニア州に着いたとき、わたしたちの身には全く安らぎがなく、ことごとく苦しんでいました。外には戦い、内には恐れがあったのです」(コリント二 7 章 5)。パウロは、この当時のパウロの心境を振り返っているのです。確かに、パウロは依然として命の危険に晒されて、パウロの心にも平安はなかったことでしょう。「しかし、気落ちした者を力づけてくださる神は、テトスの到着によってわたしたちを慰めてくださいました」とパウロは書いています。神は、パウロを力づけたように、気落ちした人、慰めを必要とするすべての人を力づけてくださる方なのです。

パウロ達が、かつて反対に遭ったのと同じように、それぞれ町に残ったクリスチャンの兄弟姉妹達もまた様々な形で反対に遭ったに違いありません。キリストの御言葉を宣べ伝えた人たちが反対にあったのですから。キリストの言葉を受け入れた人々の上にもどれほどの困難があった事でしょうか。兄弟姉妹がそれぞれ、信仰の戦いの中にありました。恐れと不安のために気落ちしていたパウロを神様は、力づけて励ましくくださった。神に慰められたパウロは、戦いの中にいる兄弟姉妹達の力になりたいと願ってこのマケドニア地方を巡り歩いたのです。かつて、パウロ達につきまとうかのように反対し苦しめてきたユダヤ人やパウロを妬んで牢に入れた人達とその町々にいるのです。どこでその人達にであうかわかりません。今度この人たちが一体何を仕掛けてくるか分からないのです。しかし、それでもパウロはその町々を巡り歩いて行きました。そうしてパウロは言葉を尽くして人々を励ましました。そしてパウロはギリシャの方についてそこで三ヶ月をすごしました。パウロの行く先ギリシャは、アカイア州(19 章 21)とくにコリント方面だと考えられています。パウロは、ここコリントでローマ信徒への手紙を書きます(ローマ 15 章 22 - 29)。パウロが、案じていたように反対者達は暗躍しておりました。シリア州に向かって船出しようとしていたときユダヤ人達が何かをよからぬ陰謀を企てておりました。パウロが、マケドニアで伝道していた時からつきまどってきたユダヤ人達もそこにいたのかもしれない。この企ては、パウロ達にも知るどころとなりました。そこで、急遽進路を変更しパウロはマケドニア州を通過して帰ることになりました。パウロの同伴者の名が七人あります。この人たちの中に、エルサレム教会の貧しい人々のためへの献金を集めたことでパウロの手紙にも名が記されています。ベレア出身のソパトロ、ローマの信徒への手紙にテモテらと共に名を連ねている協力者ソシパトロと同一人物ではなかろうか言われます(ローマ 16 章 21)。テサロニケのアリスタルコはエフェソの町の騒動の時に捕まえられた人の一人です(使徒 19 章 29)。セクンドについてはこの他には出てきません。デルベ出身のガイオも騒動の時にアリスタルコと一緒に捕まえられた人です。リストラからパウロの一行に加わったテモテ(使徒 16 章 1 - 3)。アジア州のティキコは「彼は主に結ばれた、愛する兄弟であり忠実に仕える者です」(エフェソ 6 章 2 1 , コロサイ 4 章 7)といわれています。エフェソ出

身のトロフィモ(使徒 21 章 29、テモテニ 4 章 20 に出てきます)。

この七人は、先に出発してトロアスで一行を待っていました。そして一行は、除酵祭の後フィリビから船出し、五日かかってトロアスに着き、七日間、そこに滞在しました。パウロが語った慰めの言葉は何だったのか。それはイエスキリストの言葉です。このキリストの言葉を、パウロ達はどこにいても語り続け語り、人々も熱心にこの御言葉を受け入れ聞きつづけて来たのです(17 章 11)。「あなたがたの間で宣べ伝えた神の子イエス・キリストは、『然り』と同時に否となった様な方ではありません。この方においては『然り』だけが実現したのです。神の約束は、ことごとくこの方において『然り』となったからです」確かに、パウロの伝道は次々と困難にぶつかります。しかし、パウロがこのように次々と反対にあったということ。こうしたこともまた神の計画であった事です。エルサレムへそしてローマへの道は、既に神がパウロに示された道であったのです(使徒 19 章 21)。

[説教者：堀地敦子]